

原発性硬化性胆管炎 (PSC) に潰瘍性大腸炎 (UC) を合併した 2 症例を経験したので報告する。

症例 1 は 38 歳男性で、自覚症状はない。入院時肝胆道系酵素の著明な上昇を認めた。ERCP で肝内外型 PSC と診断した。肝生検で PSC Stage 1~2 であった。注腸造影・大腸内視鏡検査で全大腸炎型 UC の所見であった。

症例 2 は 21 歳男性で、時々下痢を認めた以外症状はない。入院時軽度の肝胆道系酵素上昇を認めた。ERCP で肝内外型 PSC と診断し、肝生検で PSC Stage 1, 注腸造影・大腸内視鏡検査で全大腸炎型 UC と診断した。PSC の症例では臨床症状に乏しくても大腸検査を行うべきであると考えられる。

#### LST の内視鏡的切除の適応について

(浦和市長立病院内科, \*同外科)

畔田浩一・佐々木宏晃・内田耕司・  
辻 忠男・田宮 誠・高橋哲也\*・  
山藤和夫\*・戸倉康之\*

LST に対し過去 3 年に当院で施行した内視鏡的切除例 32 症例 36 症変, 外科的切除例 11 症例, 計 43 症例 47 病変を対象に内視鏡的切除の適応について検討した。LST は工藤らの分類に準じて検討した。顆粒均一型が 31.9%, 顆粒結節型が 19.1%, flat elevated type が 48.9% であった。顆粒均一型は SM 癌の比率が非常に少ないことから積極的な EMR の適応と考えた。顆粒結節型, flat elevated type では non lifting sign がなく 25mm 以下を EMR の適応と考えた。なお, 今回の検討では pseudo depressed type は認めなかったが, 20mm 以上では約 50% に SM 癌を認めるといわれ, EMR の適応は慎重に対処すべきと考えた。

#### 大腸良性リンパ濾胞性ポリープの 1 例

(八王子消化器病院, \*東京女子医大第二病理)

加藤博士・野沢秀樹・宮園裕子・  
武雄康悦・木村政人・梁取絵美子・  
鈴木修司・前村 達・今里雅之・  
田中精一・鈴木 衛・林 恒男・  
羽生富士夫・笠島 武\*

症例は 79 歳男性。1998 年 10 月, 肛門部違和感のため大腸内視鏡検査を行ったところ, 直腸 Ra および Rb に 2 個の山田 I 型の粘膜下腫瘍様隆起性病変を認めた。大きさはともに 7mm 大で, 表面平滑, 弾性硬, 色は周囲粘膜と同等であった。これらに対し内視鏡的ポリペクトミーを施行した。切除標本では, 粘膜下を中心に胚中心を有するリンパ濾胞の過形成を認めた。リ

ンパ球の異型や免疫組織化学的染色での monoclonality はみられず, 良性リンパ濾胞性ポリープ (rectal tonsil) と診断した。rectal tonsil は本邦では文献報告例が少なく, 比較的稀な疾患である。若干の文献的考察を加え報告する。

#### 潰瘍性大腸炎経過中に生じた若年性大腸癌の 1 切除例

(植竹病院)

富岡寛行・渡邊和義・  
久保英三・末永洋右

患者は 26 歳女性。9 歳時全大腸炎型潰瘍性大腸炎と診断され, 16 歳まで頻回再燃を繰り返していた。その後今回入院に至るまではサラゾピリン内服とステロイド注腸で長期緩解が得られていた。入院までのステロイド総用量は 51,000 mg であった。今回腹痛・腹満感を自覚し精査を施行したところ, 多発大腸癌および骨盤内腫瘍, 腹膜播種性転移による麻痺性腸閉塞の診断で手術を施行した。術中所見では腹膜播種および両側卵巢転移を認め, 大腸亜全摘, 回腸囊直腸吻合術, 子宮および両側卵巢切除術を施行した。術後 5 カ月担癌生存中である。

報告例では潰瘍性大腸炎の大腸癌合併率は特に 10 年以上経過した全大腸炎型では 6.48% と高率に認められており, 本症例のような若年発症・長期経過例に対して, 定期的な surveillance が必要であると考えられた。

#### 腸閉塞症状を呈した小腸腫瘍の 2 例

(森下記念病院外科)

中上哲雄・武市智志・山田葉子・  
西山隆明・渡辺龍彦・森下 薫

小腸腫瘍は消化管腫瘍の中でも比較的稀な疾患である。今回腸閉塞症状を呈した小腸腫瘍の 2 例を経験したので報告する。

症例 1 は 53 歳女性, 腹痛を主訴に来院した。腸閉塞の診断で減圧チューブを挿入する。小腸造影, 各種画像診断で小腸腫瘍による腸重積と診断され, 回腸部分切除術を施行した。組織学的診断は小腸脂肪腫であった。

症例 2 は 43 歳女性, 腹痛, 嘔吐を主訴に紹介入院した。既往歴に飛行機事故による下半身不随がある。腸閉塞の診断で減圧チューブを挿入する。小腸造影, 腹部 US で小腸腫瘍が認められ回腸部分切除術を施行した。組織学的診断は inflammatory fibroid polyp (ifp) であった。

ifp は機械的刺激や細菌代謝性の要因による何らか

の症状に伴う増殖反応ともいわれており、既往の事故との関連も示唆された。

### デジタルビデオレコーダー HM-DR10000 の使用経験

(おぎの胃腸科クリニック) 萩野知己

ビクターで開発されたアナログビデオ信号を MPEG2 デジタル信号に変換、記録する HM-DR10000 ビデオレコーダーの使用経験を述べた。5 時間から最長 24 時間のデジタル録画ができ (LS3 モード)、これを内視鏡の所見記録に使用した。記録媒体のテープは D-VHS テープと名づけられ、安価であり、記録画像は水平解像度 500 本と精細で、記録容量は 44~50GB とハードディスクを上回る容量を持つ。内視鏡を十二指腸に挿入後、抜去するまで、連続ビデオ記録し 70~80 例が 1 本のテープに記録可能で、再生画像から得られた静止画像は精細であった

結語：ランニングコストが低く、種々の、すなわち内視鏡やレントゲン透視像の静止画像記録や音声の記録にも応用でき、今後の可能性も多いと思われた。

### 当院開設 2 年 6 カ月における高齢者手術の臨床的検討

(宮川病院)

成宮孝祐・相川琢磨・須藤 誠・  
長沼 宏・武藤晴臣・宮川晋爾

〔目的〕民間病院における高齢者手術の現状を考察すること。

〔対象〕1997 年 5 月 26 日から 1999 年 12 月 31 日までの 2 年 6 カ月の期間、当院で施行された全手術症例数 379 例中 80 歳以上の高齢者手術症例 47 例 (良性疾患 27 例、悪性疾患 20 例)。

〔方法〕①各疾患別の内訳、②術後合併症、③地理的背景につき検討を加えた。

〔結論〕①高齢者手術の悪性疾患の割合は高く臨床症状を有する疾患が多い。②肺合併症 3 例、MRSA 腸炎 1 例で肺合併症を起した症例はすべて術死し、術後の合併症が起こりにくい的確な判断と術式が必要である。③地方における高齢化社会は都市よりも進んでいるにもかかわらず病院数、病床数は不足しており、今後民間病院の担う役割は重要である。

### 当院で最近経験した HIV 感染症の 2 例

(県央胃腸病院) 遠藤昭彦・林 俊之・  
宮内倉之助・藤本 章

症例は 68 歳男性、1998 年 11 月から下痢が出現し、一時軽快した。年末から再度下痢が出現し、翌年 1 月

3 日呼吸困難で入院した。身体所見で口腔内カンジダを認め、個人背景で毎年の東南アジア渡航歴があった。胸部 X-P で両側間質陰影の増強、動脈血ガスで低酸素血症を認めた。個人背景と口腔内カンジダから AIDS を疑い調べた結果 HIV-1 抗体陽性だった。カリニ肺炎と診断し治療開始したが無効で永眠された。

2 例目は 61 歳男性、持続する粘血便で受診し、1999 年 6 月 8 日入院となる。個人背景で海外渡航歴多数であった。HCV、TPHA とともに陽性、血中赤痢アーマー抗体強陽性、個人背景と赤痢アーマー感染より AIDS を疑い調べた結果 HIV-1 抗体陽性であった。6 月 17 日 AIDS 拠点病院に転院し現在も存命中である。

### 術前胃平滑筋肉腫、脾島腫瘍との鑑別に苦慮した後腹膜原発 Castlemann disease の 1 例

(<sup>1</sup>社会保険山梨病院内科、<sup>2</sup>外科、<sup>3</sup>放射線科、<sup>4</sup>病理)

地主将久<sup>1</sup>・細田和彦<sup>1</sup>・飯田龍一<sup>1</sup>・  
矢川彰治<sup>2</sup>・門澤秀一<sup>3</sup>・小俣好作<sup>4</sup>

症例は 42 歳女性。健診で腹部腫瘤を指摘され入院した。腹部 CT 上臍胃間に径 55×35mm の表面平滑、内部均質の腫瘤を認め、造影早期相で濃染効果を認めた。また血管造影では左胃動脈、脾動脈を栄養血管とする比較的均質な腫瘍濃染像の所見であった。以上より富血管性腫瘍と判断、鑑別として解剖的位置、画像上の性質から胃平滑筋腫を含めた消化管粘膜下腫瘍、脾島腫瘍、paraganglioma 等の後腹膜原発病変を考えたが、malignancy は否定できず腫瘍摘出術を施行した。

術後病理所見は皮髄境界の消失した萎縮性リンパ濾胞過形成で浸潤リンパ球に悪性を示唆する所見を認めず、濾胞内部や周囲に硝子化した小血管を認めた。以上の所見より後腹膜原発 Castlemann disease, HV type と診断した。

本症は稀であるが腹部腫瘤の鑑別の際考慮して診断を進める必要があり、貴重な症例と考え報告する。

### 市中病院における乳癌手術の現状

(所沢胃腸病院、\*防衛医大第一外科)

新井俊文・小林秀規・佐々木一元・  
田巻国義\*・西田正之\*・佐藤一彦\*

近年乳癌術式は、拡大手術の治療成績の限界、早期症例の増加、患者の整容的要求などの状況に対応し縮小傾向にある。当院においても胸筋温存手術が主流を占めており、乳房温存手術も慎重な術前診断のもと年々増加している。今回 1997 年 1 月から 1999 年 12 月までの 3 年間に当院で施行された乳癌症例 141 例中